

3. 下馬遺跡第4次発掘調査報告

1. はじめに

下馬遺跡は、京都府相楽郡精華町大字下狛小字下馬・片山に所在する。遺跡は縄文時代から中世にかけての集落遺跡であり、なかでも奈良～平安時代の遺構・遺物が中心的な時期を占める。

今回の発掘調査は、八幡木津線道路整備促進業務に係る発掘調査であり、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。当事業に係る下馬遺跡の発掘調査は、平成20年度から実施してきている。

平成22年度は、前半期に下馬遺跡第3次調査(D3・4地区)の発掘調査を実施し、既に報告を終えている。後半期には、下馬遺跡第4次調査としてD5地区の発掘調査を実施した。今回は、最終調査となった下馬遺跡D5地区の発掘調査について報告する。

現地発掘調査および整理作業にあたっては、京都府山城南土木事務所、京都府教育委員会、精華町教育委員会など関係各機関の方々をはじめ、作業員・調査補助員・整理員の方々のご協力を得た。記して感謝します。なお、調査に係る経費は、全額、京都府山城南土木事務所が負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

現地調査担当者 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛
同 主任調査員 竹原一彦

調査場所 相楽郡精華町下狛小字下馬・片山

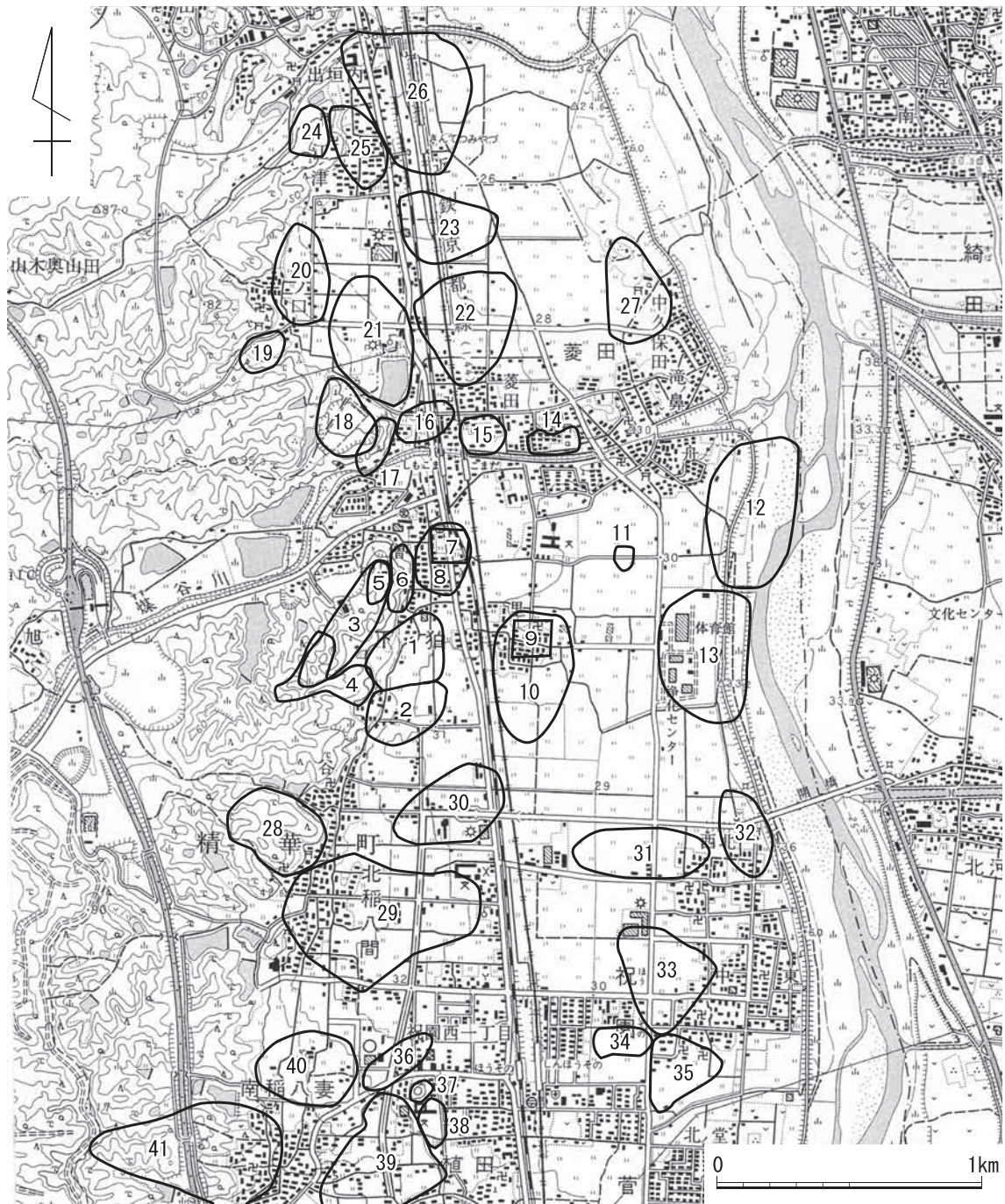
現地調査期間 平成22年11月1日～平成23年1月28日

調査面積 800㎡

2. 位置と環境

相楽郡精華町は京都府南部の南山城地域にあって、町域の東部は木津川左岸の沖積平野が広がり、中央部以西には奈良県と行政界を接する丘陵が広がる。木津川左岸の沖積平野部は、ほぼJR片町線と近鉄京都線付近を境に東の氾濫平野と西の扇状地に二分される。氾濫平野ではかつての木津川が蛇行していたことを示す旧河道の痕跡や自然堤防が認められ、特に古い集落は自然堤防・扇状地・段丘など、木津川の氾濫を回避し得る地形条件を求めて立地している。

下馬遺跡は、町域北西部の丘陵裾部扇状地に所在する。これまで平成20～22年度(第1～3次調査)にかけて発掘調査を実施し、縄文時代晩期～中世にかけての集落関連遺構と遺物を検出した。下馬遺跡の中心となる時期は、奈良～平安時代と室町時代である。奈良～平安時代には、掘立柱建物跡・柵列・井戸・溝・自然流路など多数の遺構が扇状地の東部域に分布する。また、室町時代には、扇状地の扇央部でもある西側丘陵裾に土坑や井戸・炉跡などの遺構が集中し、火舎



- | | | | | |
|-----------|-------------|------------|------------|-----------|
| 1. 下馬遺跡 | 9. 里廃寺 | 17. 薬師山遺跡 | 26. 宮の下遺跡 | 34. 城ノ内遺跡 |
| 2. 片山遺跡 | 10. 里遺跡 | 18. 平谷古墳群 | 27. 元屋敷遺跡 | 35. 古屋敷遺跡 |
| 3. 鞍岡山古墳群 | 11. 石ヶ町遺跡 | 19. 白山遺跡 | 28. 城山遺跡 | 36. 北尻遺跡 |
| 4. 大福寺遺跡 | 12. 百久保地先遺跡 | 20. 屋敷田遺跡 | (稲屋妻城跡) | 37. 丸山古墳 |
| 5. 鞍岡神社遺跡 | 13. 棕ノ木遺跡 | 21. 宮の口遺跡 | 29. 北稲遺跡 | 38. 祝園遺跡 |
| 6. 鞍岡山遺跡 | 14. 春日神社遺跡 | 22. 山路遺跡 | 30. 柿添遺跡 | 39. 森垣外遺跡 |
| 7. 下狛廃寺 | 15. 前川原遺跡 | 23. 桑町遺跡 | 31. 西垣内遺跡 | 40. 南稲遺跡 |
| 8. 拝殿遺跡 | (大北城跡) | 24. 三山木廃寺 | 32. 祝園神社遺跡 | 41. 政ヶ谷遺跡 |
| | 16. 西の口遺跡 | 25. 佐牙垣内遺跡 | 33. 中垣内遺跡 | (稲八妻城跡) |

第1図 調査地および周辺遺跡位置図(国土地理院 1/25,000 田辺)

や中世瓦が出土している。

下馬遺跡の周辺には、縄文時代から中世の各時期の遺跡が数多く分布している。

縄文時代については、中世の代表的な遺跡である椋ノ木遺跡で縄文土器が出土しているほか、百久保地先遺跡が知られ、下馬遺跡背後の丘陵上に所在する大福寺遺跡では石匙が出土している。

弥生時代には、大福寺遺跡で弥生時代後期の台状墓や土壙墓が検出されており、北側丘陵上の鞍岡神社遺跡では、磨製石鎌が採取されている。下馬遺跡の南隣に位置する片山遺跡では、石包丁が出土している。また、散布地であるが、下馬遺跡北側の扇状地に山路遺跡(前期)と西ノ口遺跡(後期)、丘陵上に薬師山遺跡(後期)が存在する。

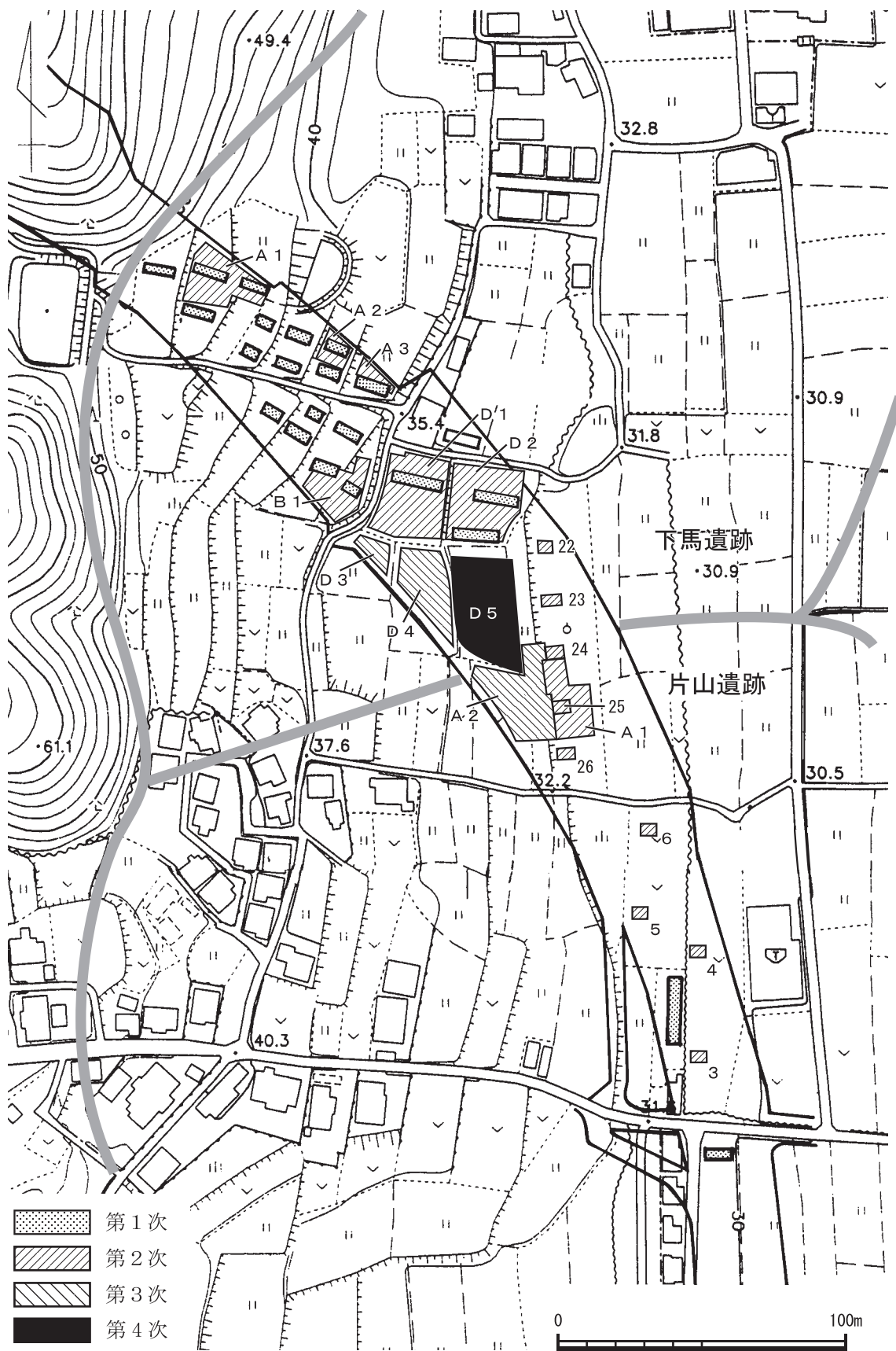
古墳時代では、町域北部丘陵上に平谷古墳群(前期～後期)、鞍岡山古墳群(前期～中期)が煤谷川を挟んで対峙する。鞍岡山古墳群は4基の円墳からなる古墳群である。盟主墳である3号墳(中期前半)は直径約40m、高さ約8mを測り、墳丘には葺石と埴輪が伴う。埋葬施設には2基の粘土槨が存在している。過去に埋葬施設を荒らされた際に甕龍鏡が1面出土している。鏡以外では、平成21年度の調査において短甲・鎌・剣等の鉄器類、ミニチュア石製工具等、玉類などの豊富な副葬品が出土している。直径30mの1号墳(前期後半)は未調査であるが、過去に墳丘裾から埴輪棺が出土している。2号墳(直径30m、高さ3m)は平成20年度に当調査研究センターが発掘調査を実施し、長大な木棺直葬の墓壙内で2基の割竹形木棺の痕跡を検出した。規模の大きな西棺では棺外から鉄製武器(剣1点・槍4点)が、やや小さな東棺では棺内から仿製四獣形鏡1面と玉類が出土した。また、同丘陵では大福寺採集と記された陶棺(大福寺古墳)の存在が伝えられるが、大福寺古墳の位置については不明である。近隣での古墳時代集落としては柿添遺跡が知られ、前期の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝・土坑が検出されている。また、下馬遺跡から約1.6km南に位置する森垣外遺跡では、大壁住居跡や掘立柱建物跡などで構成される古墳時代後期の集落跡が確認されている。

奈良時代以降では、下馬遺跡の東側平野部に里廃寺(飛鳥時代後期～奈良時代)が知られる。また、下馬遺跡の南に隣接する片山遺跡では、下馬遺跡と同じく奈良時代～中世の建物群等が検出されている。里廃寺と下馬・片山遺跡の間には、平城京と地方を結ぶ官道である奈良時代の山陰・山陽併用道が通っていたと推定されている。丘陵南側裾部に位置するJR下粕駅付近には下粕廃寺(平安時代後期～中世)が存在する。下粕廃寺を含む一帯は拝殿遺跡(古墳時代後期～奈良時代)でもある。また、鞍岡神社遺跡では、瓦が採取されている。

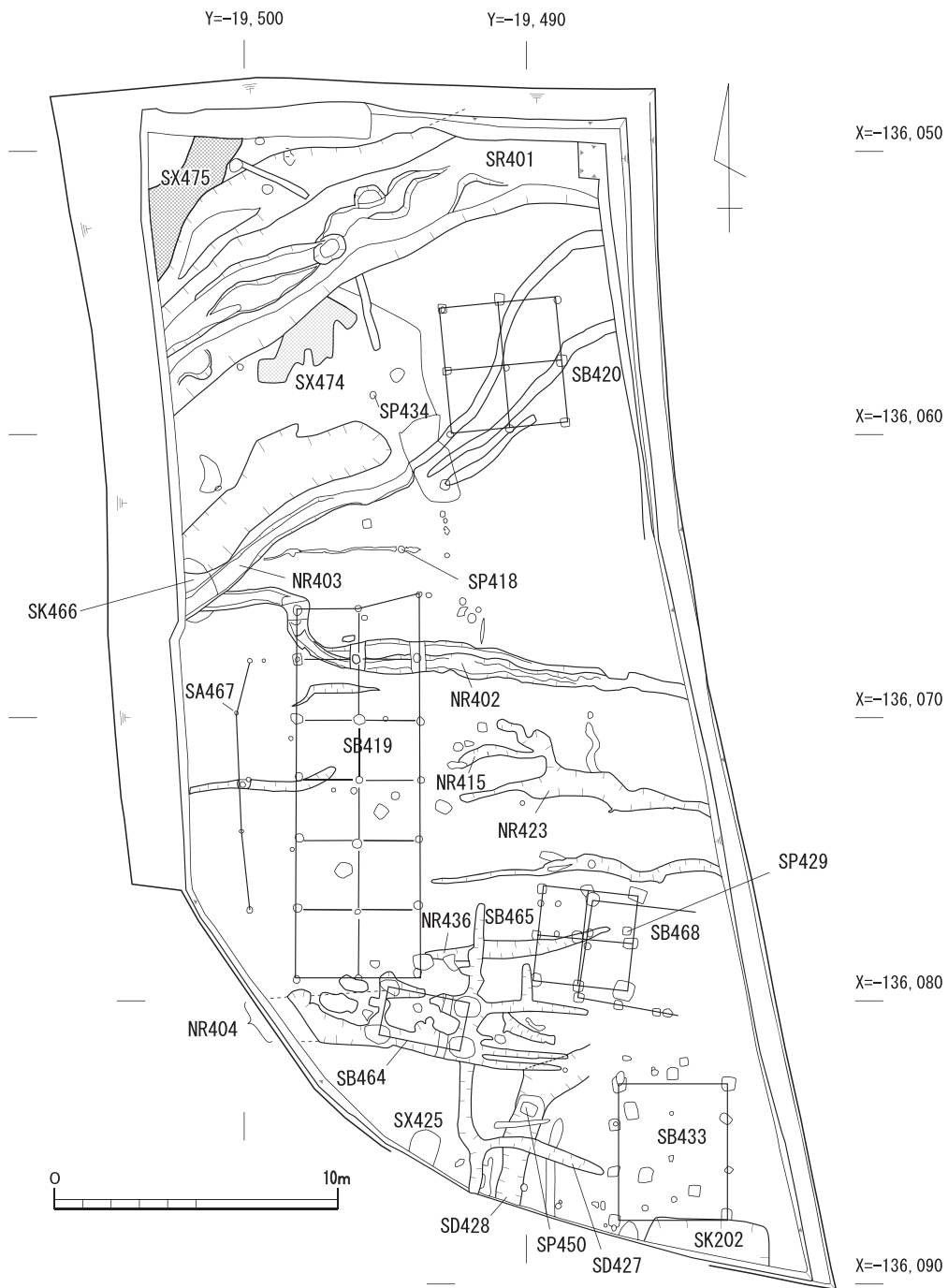
中世には周辺部で遺跡数が増加する。特に椋ノ木遺跡では掘立柱建物跡・柵・井戸・土壙墓・溝等が検出されており、中世の代表的な遺跡として知られる。また、平野部には条里地割の規制を受けた畦畔・水路・道路の景観が良く残っている。

3. 調査概要

今回の調査地は下馬遺跡の南東端部に位置し、D5地区として調査した。D5地区は、過去に調査を実施したD2地区(第2次調査)の南側、D4地区(第3次調査)の東側に位置する。また、



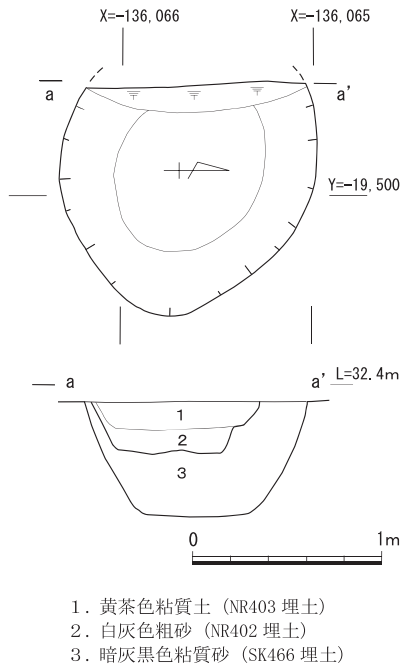
第2図 調査トレンチ配置図



第3図 D5地区平面図

このD5地区の南東部は、片山遺跡A2地区(第3次調査)に隣接している。

D5地区の調査前の現状は西から東にかけて階段状に下がる水田の一つであり、米の収穫を待って発掘調査を実施した。現地調査は遺構面の直上までバックホー等の重機を使用して表土層の除去を行い、その後は人力により遺構検出および掘削を実施した。調査の結果、縄文時代～中世の遺構を検出した。検出遺構には掘立柱建物跡・柵列・土坑・木棺墓・自然流路等がある。以下、主要な検出遺構と遺物について報告する。



第4図 土坑 S K 466実測図

1) 検出遺構

西から東に向かって緩やかに下がる遺構面を検出した。遺構面の標高は調査地西端部で32.2m、東端部では同31.3mを測る。遺構面の精査により縄文時代～中世の遺構を検出した。

(1) 縄文時代

土坑 S K 466 (第4図) 調査地中央部西端で検出した土坑である。土坑は西端が調査地外へ続いており、その全容は不明であるが、平面形は東西に長軸をとる楕円形と推定される。また、土坑の上部は奈良時代の自然流路 N R 402 と時期不明の流路 N R 403 に切られている。土坑規模は南北2.7m、東西は検出長2.45m、深さ約1.2mを測る。土坑底はほぼ平坦で、壁面は斜め上方に立ち上がる。土坑内には暗灰黒色粘質砂が堆積し、土坑底付近から縄文時代晩期の土器(第12図17)が出土した。

(2) 古墳時代

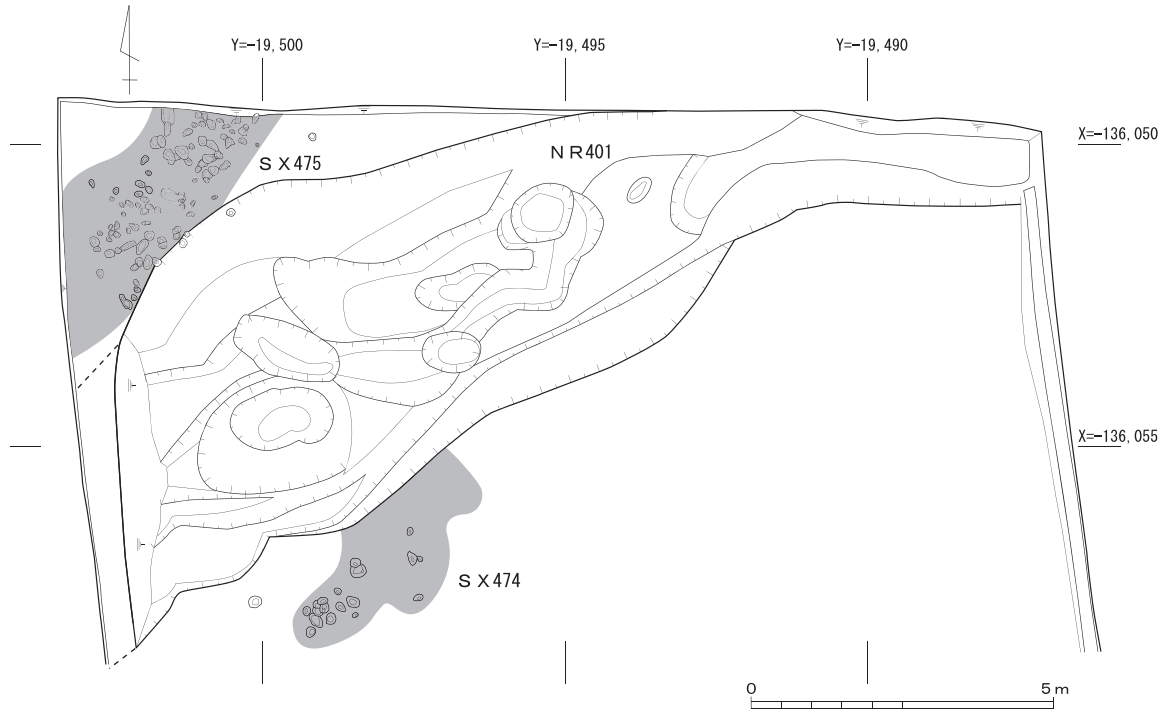
自然流路 N R 401 (第5図) 調査地の西側丘陵谷部から東方向に流れる流路である。流路の規模は幅約4.2～5.5m、深さは検出面から約1.3m、検出長は約16.5mを測る。流路の底面は平坦ではなく荒れた状況にあり、狭小で蛇行する流路痕や多数の凹凸が確認された。流路底面から0.4mの深さを測る大きな窪みも存在している。流路内には灰色・暗灰色・白色等の砂が互層に堆積していた。N R 401に伴う遺物はほとんど出土していないが、流路中央付近の南岸に近い砂層中(中層部)から古式土師器(第12図18～20)が出土した。この古式土師器の年代観から、N R 401中層部の砂の堆積は古墳時代前期とみられる。流路の最終埋没時期については不明である。

(3) 奈良時代 奈良時代の主要遺構としては、中央部で数本の流路を検出した。

自然流路 N R 402 (第6図) 調査地中央を西から東方向に流れる流路である。流路の西部は大きく蛇行するが、中央部から東部はほぼ直線的である。検出全長は約18m、幅は一定ではなく0.6～1.2mを測る。底面は平坦ではなく、細い流路の痕跡や多数の窪みが存在している。流路内には灰色系の粗砂が堆積し、多量の土器(第11図1～15)や少量の瓦(第11図16)が含まれていた。

自然流路 N R 415・423 (第3図) N R 402の南側で検出した東西方向の流路である。調査地の西部から中央部付近まではN R 415とN R 423を含む数本の細い流路であったとみられるが、調査地中央部の東側地点で合流し1本の流路となる。全長は約9mを測る。N R 415とN R 423の流路幅は0.2～0.4m、深さは約0.2～0.3mである。底面には凹凸がみられる。流路内には灰色系の砂が堆積し、須恵器杯B(第12図21)が出土した。

自然流路 N R 436 (第3図) 調査地南部の中央部、N R 436の南約6m付近で検出した東西方向の流路である。全長6.7m、最大幅0.6mを測る。流路の底面は比較的なだらかである。流路内



第5図 自然流路NR401実測図

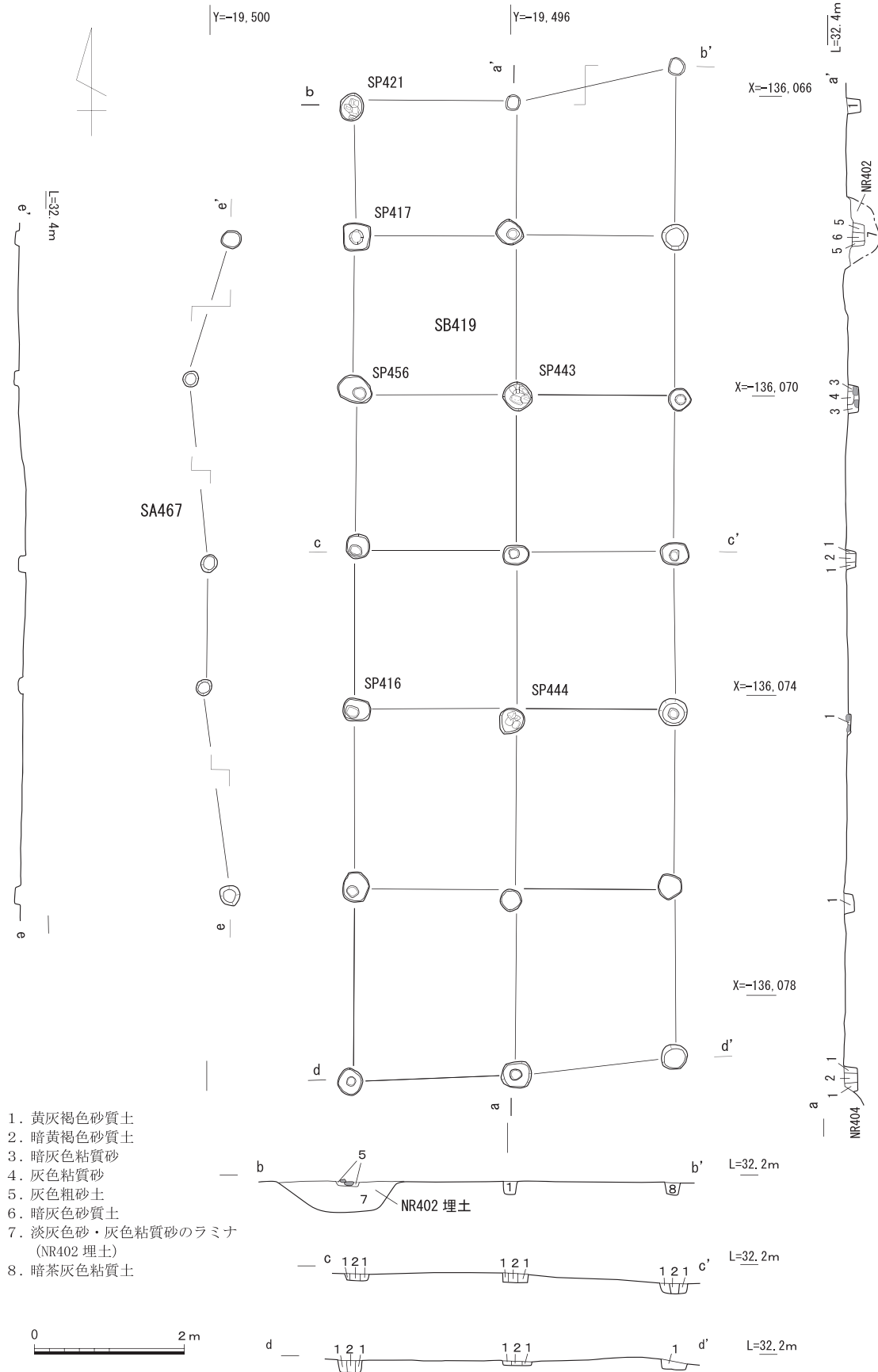
には灰色系の砂が堆積し、土師器甕(第12図22)が出土した。

その他の自然流路(第3図) NR402の南側には先のNR415・423・436以外にも東西方向に流れる同様な細い流路が存在する。遺物が出土しておらず時期は不明であるが、規模・形状・堆積土の状況から奈良時代の流路である可能性が高い。

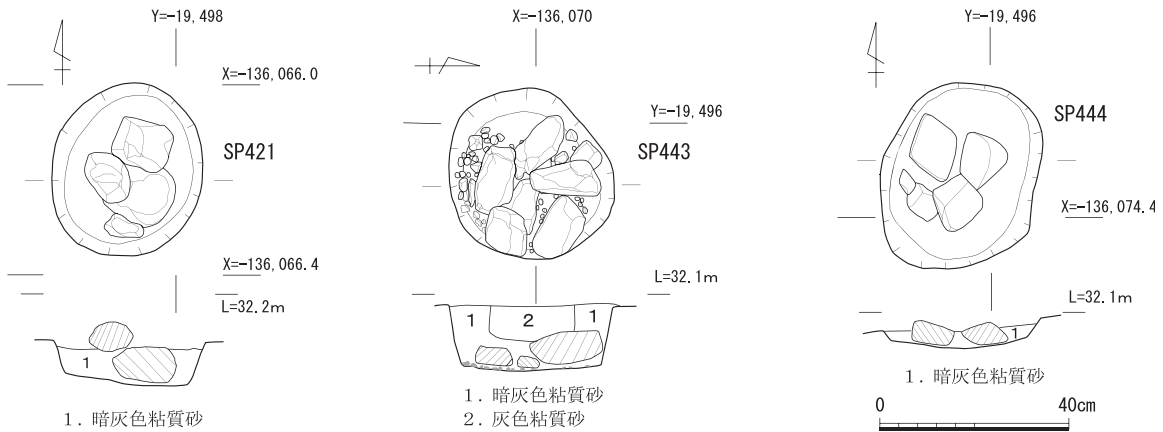
(4)平安～鎌倉時代 掘立柱建物跡・柵列・自然流路・土坑・木棺墓を検出した。

掘立柱建物跡SB419(第7・8図) 調査地南部の西側で検出した総柱の掘立柱建物跡である。南北棟で、建物規模は桁行6間(12.9m)、梁間2間(4.3m)を測る。桁行では、中央と西側の柱列が柱穴位置を東西ではほぼ揃えるが、東側柱列は北端の柱穴が北方向に約0.4m突出している。この東側柱列の全長は13.3mを測る。柱穴の掘形は円形で、直径が0.3m前後、深さは0.05～0.15mを測る。建物を構成する18基の柱穴中、SP421・443・444の3基の掘形内に根石が存在した。根石には複数個の川原石を使用している。SP421は直径約0.3m、深さ約0.1mの規模を測る。平坦ながらも東にやや傾斜する底面の南東部に、平坦面をもつ川原石を据え、その川原石の周縁部にやや小さな川原石を3石配置する。これらの石は根石および柱の根絡みとみられる。SP443は直径約0.3m、深さ約0.15mの規模を測る。底面に長さ15cm程の長方形の川原石7石を密集させている。この根石は平坦面を上に向けている。また、底面には1～2cmの小石も認められた。SP444は直径約0.3～0.4m、深さ約0.05mの規模を測る。底面の中央に4個の川原石を据え根石としている。根石は平坦面を上に向けている。柱穴に伴う遺物はわずかで、SP416の掘形内から瓦器碗(第12図27)が出土した。建物跡の方位はほぼ真北である。

掘立柱建物跡SB420(第9図) 調査地の北東部、SB419の北東で検出した総柱の掘立柱建物跡である。建物規模は東西2間(4.2m)、南北2間(4.4m)を測る。柱穴の掘形は円形で、直径



第7図 掘立柱建物跡S B419・柵列S A467実測図



第8図 掘立柱建物跡S B 419主要柱穴S P 421・443・444実測図

約0.3m前後のものが多数を占める。各柱穴の底面は深さが水平ではなく、西側柱穴の底面は高い位置にあり、東側に向かうほど底面は低い位置にある。このような状況からS B 420は西から東に向かって下がる斜面地に立地していたとみられる。建物跡の方位は北から西に約4°振る。柱穴内からの出土遺物はほとんどみられない。

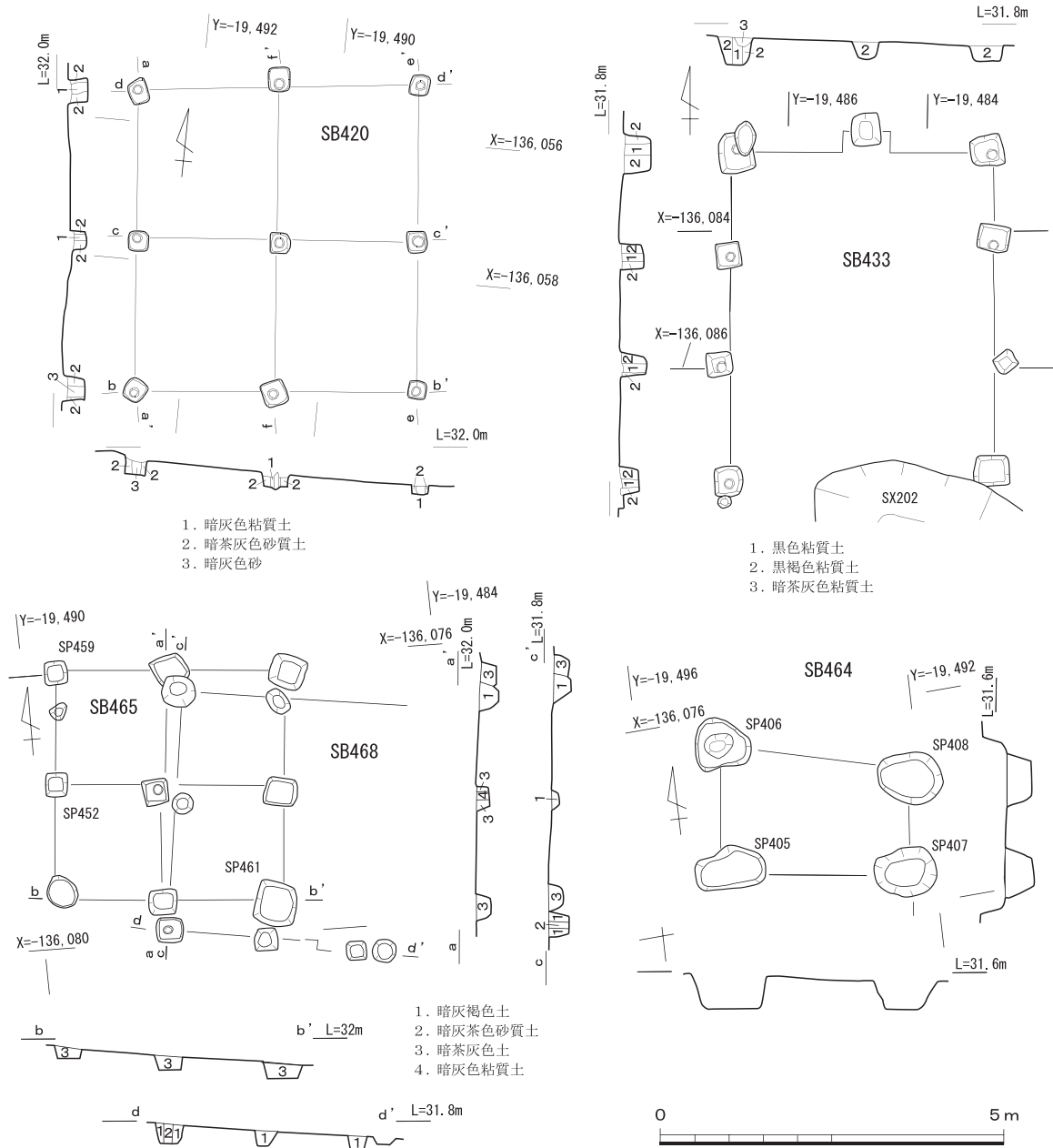
掘立柱建物跡S B 433 (第9図) S B 419の南東部で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。建物規模は桁行3間(4.8m)、梁間2間(3.9m)を測る。柱穴の掘形は方形と円形が混在するが、大多数は方形である。掘形の規模にも大小があり、一辺0.3~0.6mとばらつく。柱穴の深さはおおむね0.2mである。建物柱穴に伴う遺物には土師器の細片があるが、時期判定には至っていない。建物跡の方位は北から東に約1°振る。

掘立柱建物跡S B 465 (第9図) S B 433の北側で検出した総柱の掘立柱建物跡である。建物規模は東西2間(3.2m)、南北2間(3.4m)を測る。柱穴の掘形は方形で、このうちS P 461は0.4×0.6m、S P 452は一辺0.3mを測る。深さは約0.15m前後である。建物跡の方位は北から東に約5°振る。建物柱穴内からの出土遺物はない。

掘立柱建物跡S B 464 (第9図) S B 419の南側で検出した東西棟の掘立柱建物跡である。建物規模は東西1間(2.7m)、南北1間(1.5m)を測る。柱穴は自然流路N R 404に切られて埋没しており、N R 404の底面の精査で柱穴を検出した。柱穴の掘形は楕円形で、小型のS P 406は長径約0.6m、短径0.4m、大型のS P 407は長径1.0m、短径0.6mの規模を測る。各柱穴の深さはおおむね0.7m前後である。S P 405から瓦質羽釜の脚部(第12図23)、瓦器皿(同24)、土師器皿(同25)が出土した。また、S P 407からも瓦器椀(第12図28)が出土している。建物方位は北から東に約10°振る。建物の時期は、出土遺物の年代観から13世紀前半と考えられる。

掘立柱建物跡S B 468 (第9図) S B 465と重複する掘立柱建物跡で、S B 465より新しい。建物跡東部の柱穴が後世の削平で失われているが、東西棟の建物と考えられる。建物跡は東西2間(1.35m)以上、南北2間(1.8m)とみられる。柱穴の掘形には方形と円形が混在している。柱穴規模は0.3~0.5mで、深さは0.2m前後を測る。建物方位は北から東に約8°振る。

柵列S A 467 (第7図) 調査地西部、S B 419の西約2mで検出した柵列である。S B 419と平

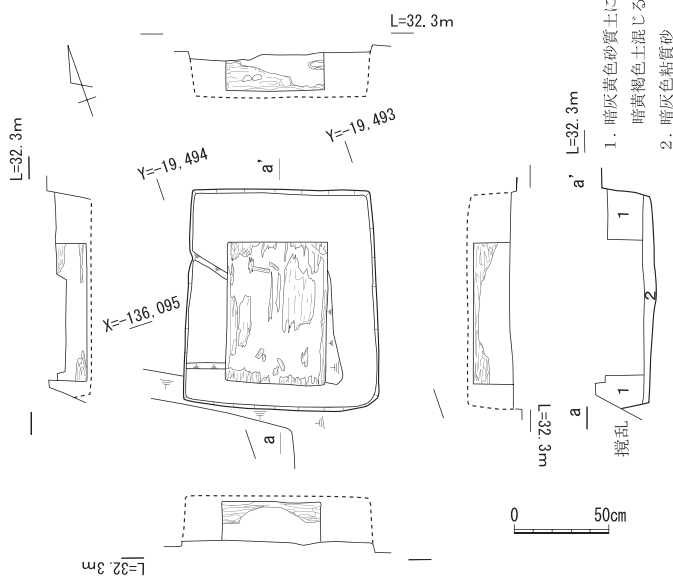


第9図 掘立柱建物跡S B 420・433・464・465・468実測図

行する位置関係からS B 419と同時期の柵列とみられる。全長は4間(8.7m)を測る。柱間は1.7～2.8mと一定間隔ではない。柱穴の掘形は円形で、直径0.2m前後、深さは0.1m前後を測る。

自然流路N R 404(第3図) 調査地南部を西から東に下る流路である。S B 419の南端とS B 464を切っている。明確な河岸の痕跡は認められないが、灰白色系の粗砂の堆積が南北幅約4m、調査地西端から東方向に約10mの範囲で確認できた。白灰色系粗砂の堆積は約0.2～0.3mの厚さであった。この堆積層中から瓦器椀等の土器(第12図33～37)が出土した。時期は13世紀である。

溝S D 427(第3図) 調査地南端付近で検出した南北方向の溝である。西端部は東西方向の溝S D 441と接続する。溝幅0.3～0.5m、全長は4.3m、深さ0.1mの規模を測る。堆積土である灰色



第10図 木棺墓 S X 425 実測図

ところである。片山 A 2 地区では検出長が 7 m を測り、今回検出分を加えると土坑の全長は約 8 m を測る。今回の調査では土師器の細片が出土した。

木棺墓 S X 425 (第 10 図) 調査地中央部南端で検出した木棺墓である。掘形は長方形で南北の長軸 2.35 m、幅 1.9~2.1 m、深さ 0.6 m の規模を測る。掘形中央部のやや南側に木棺を据えている。木棺は腐朽が進行し、厚みも 0.2~0.4 cm で脆弱であった。木棺規模は全長 1.5 m、幅 1.1 m を測る。底板と側板を検出したが一部分にとどまる。側板の下部は掘形埋土に張り付く状態で残っていたが、上部は消滅している。最も残りのよい側板の高さは北側板で 32 cm である。木棺底面は掘形の底面から 6~10 cm 上部に位置している。木棺を設置するにあたり、掘形の底に土を入れて木棺を安定させたとみられる。木棺の埋土中から瓦器椀(第 12 図 30)のほか、土師器皿の細片が出土した。時期は 13 世紀前半である。

柱穴 S P 450 (第 3 図) S X 425 の北東で検出した方形掘形の柱穴である。掘形は一辺 0.4~0.6 m、深さは 0.1 m を測る。埋土中から土師器皿(第 12 図 25)が出土した。

柱穴 S P 429 (第 3 図) S B 465 の柱穴 S P 460 の北西で検出した方形掘形の柱穴である。掘形は一辺 0.3 m、深さ 0.1 m を測る。埋土中から土師器皿(第 12 図 26)が出土した。

柱穴 S P 418 (第 3 図) S B 419 の北東から検出した円形掘形の柱穴である。掘形の直径は 0.25 m、深さ 0.15 m を測る。埋土中から瓦器椀(第 12 図 31)が出土した。

柱穴 S P 434 (第 3 図) 調査地北部、S B 420 の西側で検出した柱穴である。柱穴掘形は円形で、直径約 0.25 m、深さ約 0.15 m を測る。柱穴内から瓦器椀(第 12 図 32)が出土した。

動物足跡 S X 474・475 (第 5 図) 自然流路 N R 401 西部の両岸部分で動物(偶蹄類か)の足跡痕跡を多数検出した。N R 401 の河岸が軟弱な時に動物が横断した痕跡とみられる。足跡の時期は N R 401 の土砂堆積が進んだ段階と考えられるが、遺物が出土しないことから不明である。

砂質土から瓦器椀(第 12 図 29)が出土した。

溝 S D 428 (第 3 図) S D 427 の東側で検出した浅い溝である。南西から北東方向に直線的に延びる溝は、北部で屈曲し北東に振る。溝幅約 1.8 m、深さ約 0.2 m を測る。検出長は約 6.5 m を測る。埋土中から土師器の小破片が出土した。

土坑 S K 202 (第 3 図) 調査地南端部で検出した土坑であり、土坑北端部を検出した。土坑の南部は南隣りで実施した片山遺跡 A 2 地区調査で検出しており、既に報告を行った

2) 出土遺物

自然流路N R 402 (第11図1～16) 1～4は須恵器の蓋である。1は天井中央に宝珠つまみを付ける。口縁は内側に返りをもつ。口径13.3cm、器高3.8cmを測る。色調は明青灰色(5PB7/1)である。2は1と同形態とみられるが天井部を欠く。口径14.3cm、天井高は1.5cmである。灰白色(N7/0)である。3は口径15.4cm、器高1.4cmを測る。色調は灰白色(N7/0)である。4は口径16.8cm、器高2.2cmを測る。色調は灰白色(N8/1)である。5・6は須恵器杯Aである。口縁部はやや外反気味に丸く納める。底部外面はヘラ切り未調整である。5は口径13.2cm、器高3.8cmを測る。色調は灰色白(N7/1)である。6は口径13.3cm、器高3.8cmを測る。色調は灰白色(N7/0)である。7は須恵器杯であり、底部を欠く。口縁端部は小さく外反して丸く終わる。口縁の残存率は約1/10である。色調は青灰色(5PB5/1)である。8は須恵器杯Bである。底部高台直径は13.2cmである。色調は灰色(N5/0)である。9は須恵器長頸壺の体部である。丸みの強い体部底に高い脚が付く。脚部上端の4か所に穿孔を施す。色調は灰色(N7/0)である。10は須恵器甕の口縁部である。口径は24.2cmである。口縁部の残存率は1/10以下である。色調は灰色(N6/0)である。11は土師器甕の把手部分である。三角形を呈する把手は幅約8.2cm、長さ約5cmを測る。12は土師器甕である。口縁部内面は粗いヨコハケ、体部外面はタテハケを施す。口径21.6cm、残存高8.2cmを測る。色調はにぶい黄橙色(10YR7/4)である。13は須恵質の鉢Aで軟質である。口縁部は内湾し、端部は面をつくる。口径28.7cm、残存高8.4cmである。色調は灰白色(N8/0)である。14は土師質甕である。口縁部の直径は40.2cmを測る。口縁残存率は1/10以下である。器表面は摩滅が進行する。15は須恵器の甕である。丸みの帯びた体部の底はやや尖り気味に仕上げる。体部内面は同心円タタキ、体部外面はタタキの後、粗いカキメを施す。体部直径は43.8cm、口縁部を欠く残存高は46.1cmである。16は平瓦の破片である。凹面には細かい布目圧痕が残る。

土坑S K 466 (第12図17) 縄文時代晩期の突帯文深鉢である。体部外面に刻み目を施す突帯文を1本巡らせる。胎土には小石を多く含み、色調は灰色(5Y6/1)である。

自然流路N R 401 (第12図18～20) 18は土師器小型丸底壺である。やや扁平な体部の丸底外面はヘラケズリする。口径9.4cm、器高7.1cmである。色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)である。19・20は土師器甕である。19は口径13.4cm、残存高4.3cmを測る。色調は橙色(5YR7/6)である。20は直線的に外上方に延びる口縁の端部は内側に肥厚させて終わる。体部内面はヘラケズリ、外面は細かいハケ調整する。

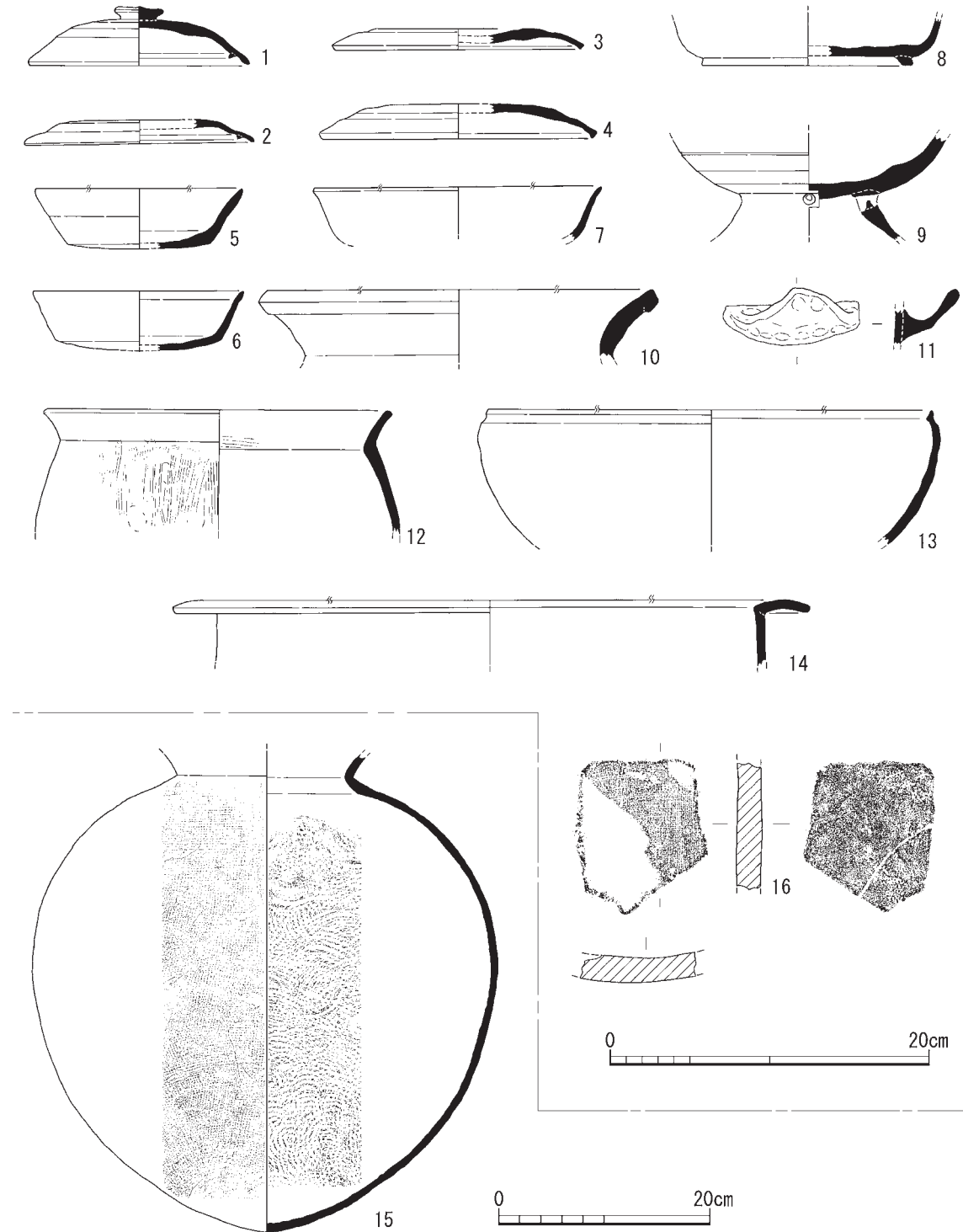
自然流路N R 405 (第12図21) 須恵器杯Bである。口縁部を欠く。高台径は9.7cm、残存高3.2cmである。色調は灰色(N5/0)である。

自然流路N R 436 (第12図22) 土師器甕の口縁部である。外反する口縁部端部は内側に折り曲げ、肥厚して丸く終わる。口縁部内面は粗いヨコハケを行う。口径16.8cmを測る。色調はにぶい黄橙色(10YR7/4)である。

掘立柱建物跡S B 464 (第12図23・24・28) 23・24はS B 464の柱穴S P 405から出土した。23は瓦質三足羽釜の脚部であり、下端部を欠く。脚上部の直径は2.7cm、残存高は12.1cmを測る。

色調は浅黄橙色である。24は瓦器皿である。口径9.8cm、器高2.1cmを測る。色調は暗青灰色(5PB3/1)である。28は柱穴S P 407から出土した瓦器椀である。口縁は直径14.8cm、残存高は3.0cmである。口縁部の残存率は1/10である。色調は灰色(N4/0)である。

掘立柱建物跡S B 419(第12図27) S B 419の柱穴S P 416から出土した瓦器椀である。口径14.8cm、残存高3.0cmを測る。口縁の残存率は1/10である。色調は灰色(N4/0)である。



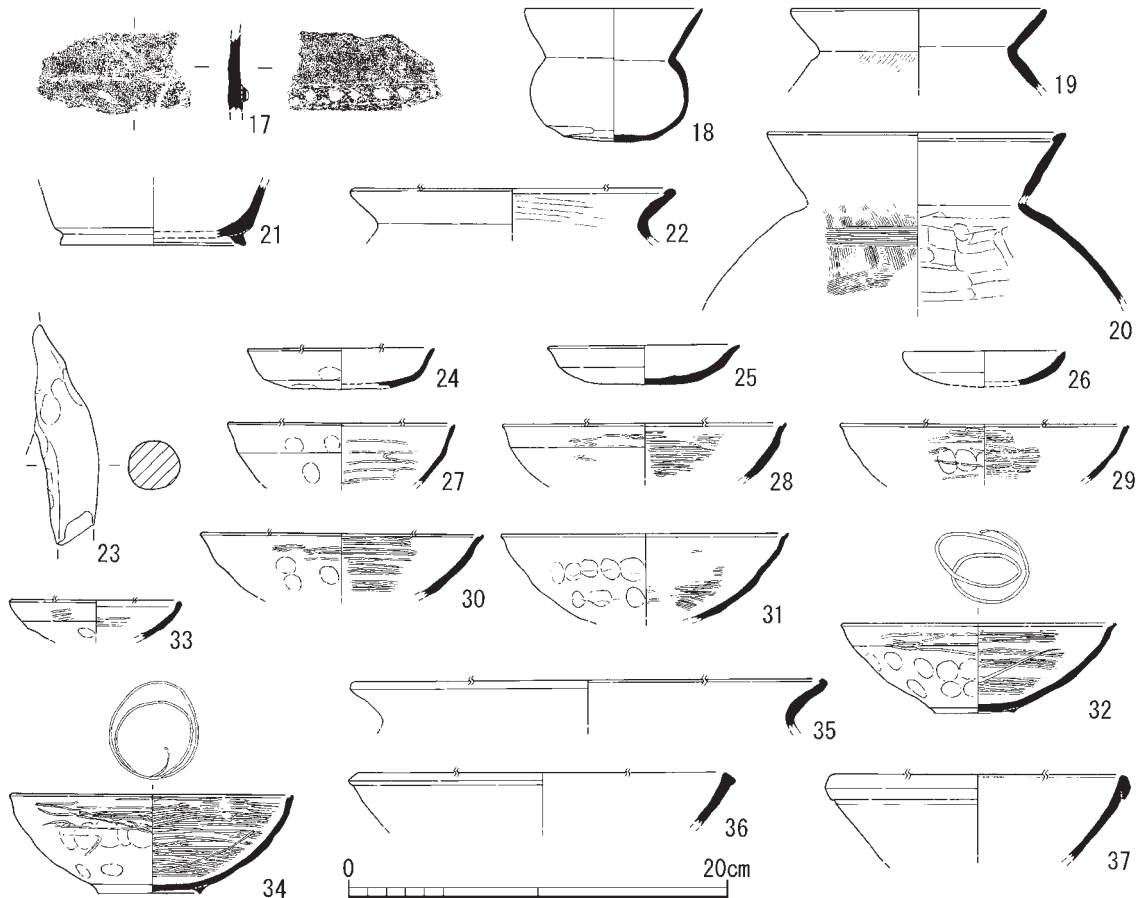
第11図 N R 402出土遺物実測図

その他の柱穴（第12図25・26・31・32） 25は柱穴S P 450から出土した土師器皿である。口径10.1cm、器高2.2cm、色調は灰白色（7.5YR8/2）である。26は柱穴S P 429から出土した土師器皿である。口径8.6cm、残存高1.8cm、色調は橙色（7.5YR7/6）である。31は柱穴S P 418から出土した瓦器椀である。口径15.0cm、残存高4.4cm、口縁部残存率は1/8である。色調は灰色（N4/0）である。32は柱穴S P 434から出土した瓦器椀である。口径14.8cm、器高5.3cmを測る。残存率は1/6である。色調は青灰色（5PB5/1）である。

溝S D 427（第12図29） 瓦器椀である。口縁端部内側には1条の凹線を巡らす。底部外面に断面三角形の小さな高台を貼り付ける。口径14.4cm、器高4.8cmを測る。色調は暗青灰色（5PB4/1）である。

木棺墓S X 425（第12図30） 30はS X 425から出土した瓦器椀である。口径15.0cm、残存高3.4cm、色調は灰色（N5/0）である。

自然流路NR 404（第12図33～37） 33・34は瓦器椀である。33の口縁は単純に丸く終わる。口径9.0cm、残存高2.1cmを測る。口縁の残存率は1/10以下である。色調は青灰色（N3/0）である。34は丸みの強い体部に断面三角形の小さな高台を貼り付ける。口縁端部の内側に凹線を施す。口径14.4cm、器高4.8cm、色調は青灰色（5PB5/1）である。35は土師器甕である。口縁端部は上方につまみ上げ丸く終わる。口径24.6cm、色調は明褐色（10YR7/4）である。36は須恵質の鉢である。



第12図 その他主要遺構出土遺物実測図

口径19.2cm、残存高2.9cm、色調は灰白色(N7/1)である。口縁の残存率は1/10以下である。37は輸入陶磁器の白磁碗である。口縁は玉縁口縁である。口径15.3cm、残存高4.6cm、口縁部の残存率は1/10以下である。

4. まとめ

今回の調査では、縄文時代晩期・古墳時代前期・奈良時代～鎌倉時代の遺構を検出した。

縄文時代の遺構は、これまで、遺跡北西側の丘陵裾に設けたA1地区から唯一自然流路SR125を検出したに過ぎなかった。今回、丘陵裾から東に下った扇状地のD5地区から、晩期の土器を含む土坑SK466を検出した。このような状況から、遺跡西側の鞍岡山丘陵(大福寺遺跡)から東側のD5地区周辺において、縄文時代晩期の集落跡が存在する可能性が高まった。

古墳時代では、前期の遺物を含む自然流路NR401を検出した。下馬遺跡の西側丘陵上では、鞍岡山2号墳の墳丘裾から布留式甕を転用した土器棺墓が検出されている。下馬遺跡ではこれまで同時期の遺構はみられなかったが、今回NR401を検出したことから調査地周辺部に同時期の遺構がさらに存在するとみられる。

奈良時代では、これまでD5地区から北西約70mのA3地区で自然流路SR16を検出している。また、ほぼ中間に位置するB1地区では溝を検出したに過ぎない。NR402・403・415・423・436はSR16に比べると小規模な自然流路である。D5地区では大規模な流路が形成されず、小規模な流路が頻繁にその流れを変化させている状況が明らかになった。

平安～鎌倉時代は、下馬遺跡の中心を占める時期にあたり、D1・2地区を中心に多数の掘立柱建物跡や柵列・井戸・土坑が分布する。なかでも掘立柱建物跡と柵列はほぼ方位を北から東に12°～40°振っている。D5地区検出の掘立柱建物跡5棟のうちSB420(N4°W)を除くSB419・433・465・468の4基はいずれも北から東への振り角が10°未満で、D1・2地区の建物・柵列群とは方位が異なる。一方、南に隣接する片山遺跡A1・2地区検出の4棟の掘立柱建物跡はほぼ真北に方位が揃う状況にあり、D5地区ではSB419・433が方位の真北からの振れが1°未満と近似値を示す。片山遺跡の建物群は奈良時代後半の建物群とみられ、柱穴掘形は方形である。SB433は建物方位と柱穴掘形が方形であることから、奈良時代の建物跡である可能性が高い。SB419は方位が真北ではあるが、柱穴掘形が円形で13世紀前半の瓦器碗が伴うことから、SB433とは時期差が生じる。SB464は12世紀後半の遺物が伴う。SB465・468は時期不明ながら平安時代に属する建物である可能性が高い。D5地区で検出した建物群は、奈良～鎌倉時代の建物跡であるが、下馬遺跡D1・2地区と一連の建物群とは異なり、建物跡の方位性は南の片山遺跡の建物群に近い。今後、調査地周辺部での発掘調査が進展した暁には、下馬遺跡と片山遺跡で検出した遺構群の性格がより明らかになるものとみられ、今後の調査に期待が寄せられる。

(竹原一彦)



(1) 下馬遺跡D地区遠景(北東から)



(2) D5地区全景(右が北)



(1) D 5 地区調査前(北から)



(2) D 5 地区全景(北から)



(3) 掘立柱建物跡 S B 420 全景
(北から)



(1) 掘立柱建物跡 S B419 全景
(北から)



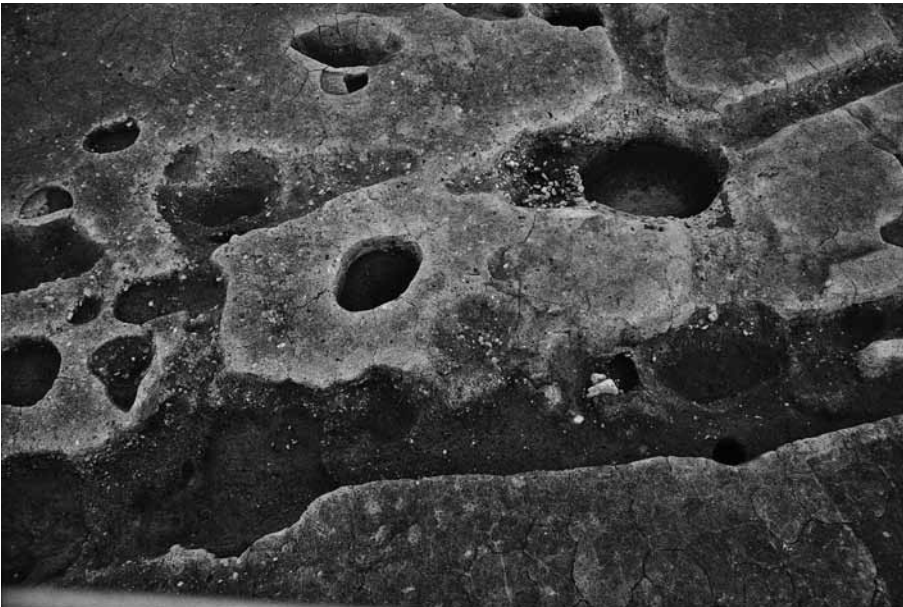
(2) S B419 柱穴 S P421
根石検出状況(西から)



(3) S B419 柱穴 S P443
根石検出状況(東から)



(1) 掘立柱建物跡 S B 433 全景
(東から)



(2) 掘立柱建物跡 S B 464 全景
(南から)



(3) 掘立柱建物跡 S B 465・468 全景
(東から)

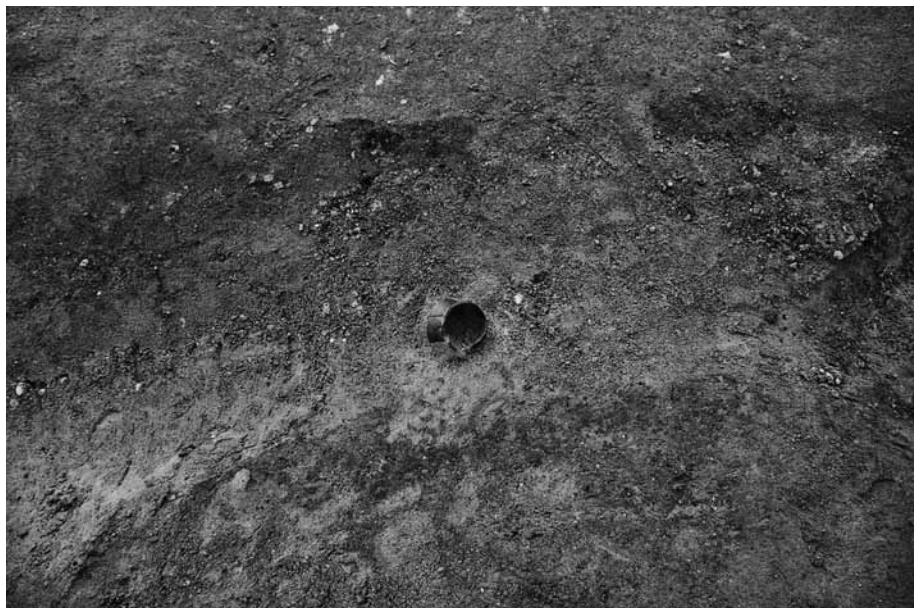
(1) 自然流路N R 401全景
(南西から)



(2) N R 401西端壁面土層断面
(東から)



(3) N R 401古式土師器出土状況
(北から)





(1) NR 401全景(東から)



(2) NR 401西部河岸の牛足跡
S X 474・475(北から)



(3) 牛足跡 S X 474(北から)



(1) S B 419・自然流路N R 402ほか
流路群(東から)



(2) N R 402中央部遺物出土状況
(北から)



(3) N R 402完掘状況(東から)



(1) 木棺墓 S X 425 (北から)

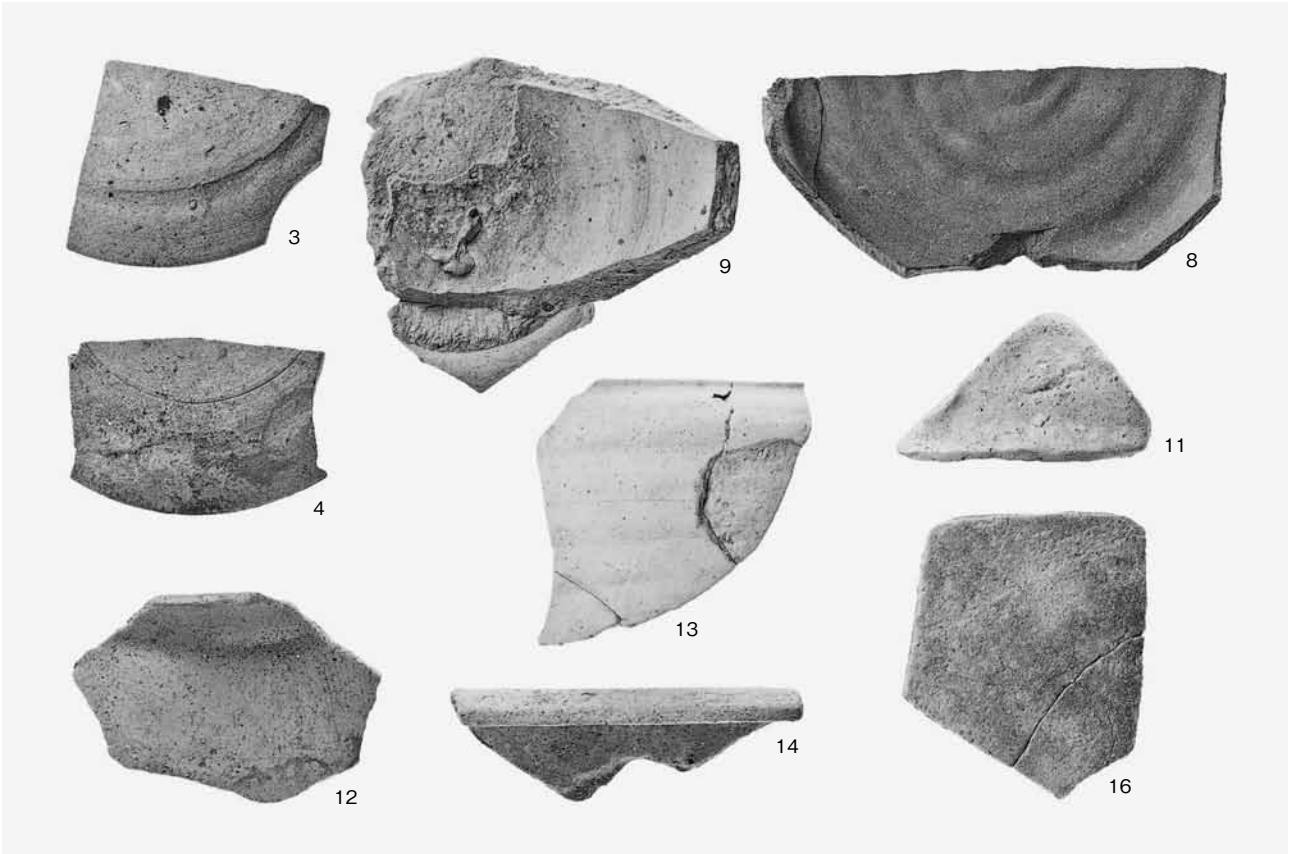


(2) S X 425 木棺側面 (南東から)

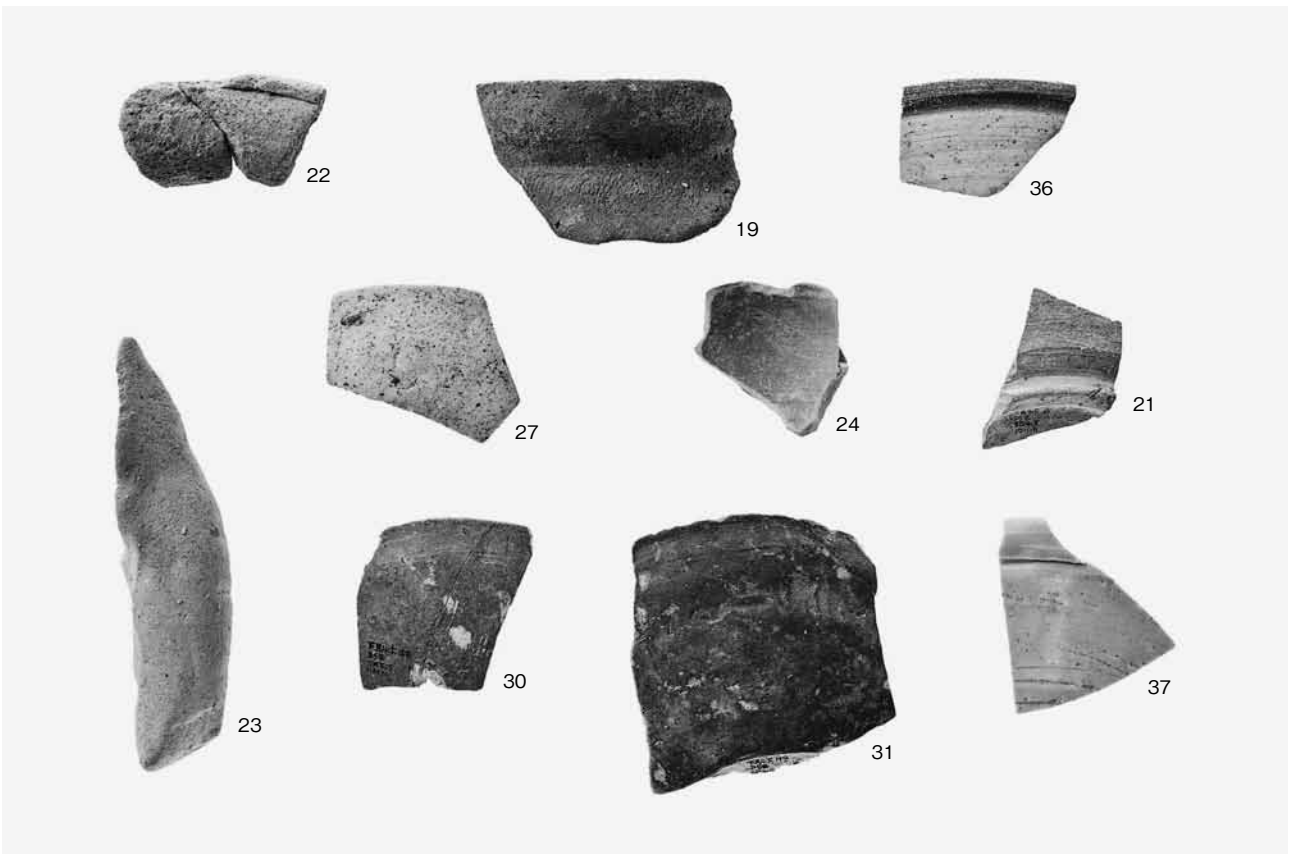


(3) S X 425 断ち割り状況 (東から)





(1)出土遺物 2



(2)出土遺物 3

京都府遺跡調査報告集 第153冊

平成24年3月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141